

# 鹿児島県のバッタ目の分布（第1報）

畑田 健治\*

The distribution of ORTHOPTERA in Kagoshima pref. [1]

Kenji Hatada

鹿児島県のバッタ目の分布については、山下(1981), 大坪(1985)がまとめている。山下は1928年(昭和3年)以降の文献と標本により、9科78種を報告しているが、さらに20種以上の棲息の可能性を示唆し、県内全域にわたる詳細な調査の必要性を指摘している。大坪は自分の採集標本を中心に、県北部(大口, 出水)の6科64種をまとめている。そこで、筆者は1981年以降の鹿児島県全域の分布の実態を明らかにするために、昨年度より収蔵標本の整理と現地調査を始めた。ここではそのうちオンブバッタ科, バッタ科, イナゴ科の3科について報告する。なお、分類は日浦(1978)に従った。

この報告を行うに当って貴重な標本をお貸しくくださった鹿児島昆虫同好会の山下秋厚氏と大坪修一氏にはこの場を借りて感謝の意を表したい。

## 1. オンブバッタ科 Pyrgomorphidae

本県にはオンブバッタ *Atractomorpha lata* MOTSCHULSKY, とアカハネオンブバッタ *Atractomorpha Sinensis* BOLIVER の2種が分布する。表1に示すようにオンブバッタは県本土と種子島, 口之島, 中之島で調査及び標本により確認しており, また, 文献の記録では屋久島, 奄美大島がある。アカハネオンブバッタは中之島, 奄美大島, 徳之島, 沖永良部島で調査及び標本により確認した。なお, 中之島の生息は筆者が1988年に確認したものである(28-X-1988 1♂, 29-X-1988 8♂採集)。

表1 鹿児島県内におけるオンブバッタ科の分布

○調査及び標本による確認    △文献による確認    ●初記載

| 地域名<br>種名  | 県本土 | 三島村 |     |    | 種子島 | 屋久島 | トカラ列島 |     |     |    |       |     |     | 奄美諸島 |      |     |     |       |     |  |
|------------|-----|-----|-----|----|-----|-----|-------|-----|-----|----|-------|-----|-----|------|------|-----|-----|-------|-----|--|
|            |     | 黒島  | 硫黄島 | 竹島 |     |     | 口之島   | 中之島 | 臥蛇島 | 平島 | 諏訪之瀬島 | 悪石島 | 小宝島 | 宝島   | 奄美大島 | 喜界島 | 徳之島 | 沖永良部島 | 与論島 |  |
| オンブバッタ     | ○   |     |     |    | ○△  | ○   | ○?    |     |     |    |       |     |     |      |      | △   |     |       |     |  |
| アカハネオンブバッタ |     |     |     |    |     |     | ●     |     |     |    |       |     |     |      |      | ○   |     | ○     | ○   |  |

表1で中之島のオンブバッタに?がついているが、これはオンブバッタかアカハネオンブバッタか判別のつかない個体の生息を示している。筆者は1988年10月28日と29日に中之島で5♀, 11♂を採集したが、うち明らかにオンブバッタが1♀1♂, アカハネオンブバッタが9♂, 観察する角度によってはかすかに赤みを帯びているように見え

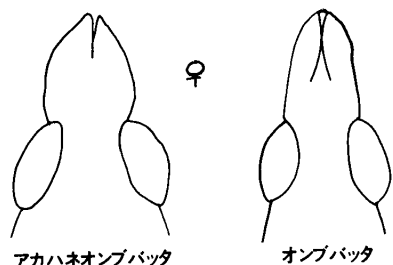


図1 アカハネオンブバッタとオンブバッタの頭の先(日浦1978より)

る個体が4♀, 1♂であった。

オンブバッタとアカハネオンブバッタの区別はふつう後翅の色で行う。透明に近い淡黄色がオンブバッタ, 鮮やかな紅色がアカハネオンブバッタであるとされる。この点について, すでに日浦(1978)は『中(アカハネ)には紅色のうすいものがあり』と指摘しており, さらに、『区別は頭の形によった方がよい。(アカハネは)頭の尖った部分は複眼よりわずかに長い程度, 両側縁はわずかに前方に狭まる(オンブでは複眼よりずっと長く, 前方へ狭まる)。』と, 後翅とは別の形質による区別を提唱している(図1)。しかし, 個体変異が多く, 提唱されているようには容易に判定できない。したがって, アカハネオンブバッタの淡色系で極端なものは, オンブバッタと誤認されるケースが高いのではないと思われる。新たな同定基準の必要性を痛感する。

図2は, 表1を基にした水平分布パターンである。オンブバッタがアカハネオンブバッタか判定のつかない個体の存在は, 淡色系のアカハネオンブバッタのオンブバッタへの誤認を高め, アカハネオンブバッタの分布域でのオンブバッタの混棲という形で記録に残ることになる。もし, 中之島以南の記録に残るオンブバッタがアカハネオンブバッタ淡色系の誤認となれば, 中之島で両種の分布が入れ替わることになる。ただ, 沖縄本島では, オンブバッタは山手に, アカハネオンブバッタは海辺に棲み分けているという報告(大城 1987)もあり, これまでの記録の洗い直しとさらに詳細な現地調査が急がれる。

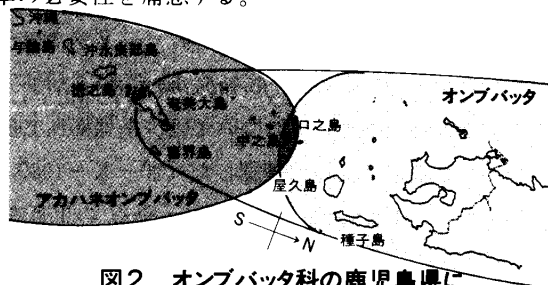


図2 オンブバッタ科の鹿児島県における水平分布パターン

## 2. バッタ科 Acrididae

本県で確認されたこの仲間は12種である(表2)。ショウリョウバッタ *Acrida cinerea* (THUNBERG), ショウリョウバッタモドキ *Gonista bicolor* (HAAN), トノサマバッタ *Locusta migratoria* LINNAEUS, マダラバッタ *Aiolopus thalassinus tamulusu* (FABRICIUS) はほぼ全域に分布し, クルマバッタ *Gastri-margus marmoratus* THUNBERG, ツマグロイナゴモドキ *Mecostethus magister* (REHN), ナキイナゴ

表2 鹿児島県におけるバッタ科の分布

○調査及び標本による確認 △文献による確認

| 種名           | 地域名 | トカラ列島 |    |    |    |    |    |    |    |   |       |    |    |   |      |    |    |      |    |
|--------------|-----|-------|----|----|----|----|----|----|----|---|-------|----|----|---|------|----|----|------|----|
|              |     | 県本土   | 三島 | 島村 | 種子 | 屋久 | 口之 | 中之 | 臥蛇 | 平 | 諏訪之瀬島 | 悪石 | 小宝 | 宝 | 奄美大島 | 喜界 | 徳之 | 沖永良部 | 与論 |
| ショウリョウバッタ    |     | ○     | ○  | ○  | ○  | △  | ○  |    |    |   |       |    |    |   | ○    |    | ○  | ○    |    |
| ショウリョウバッタモドキ |     | ○     |    |    | ○  |    |    |    |    |   |       |    |    | ○ |      |    |    | △    |    |
| トノサマバッタ      |     | ○     | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  |    |    |   |       |    |    |   |      |    |    | ○    |    |
| クルマバッタ       |     | ○     |    |    |    |    |    |    |    |   |       |    |    |   |      |    |    |      |    |
| イボバッタ        |     | ○     |    | ○  |    |    |    |    |    |   |       |    |    |   |      |    |    |      |    |
| アカアシバッタ      |     |       |    |    |    |    |    |    |    |   |       |    |    |   | △    |    | △  | ○    |    |
| マダラバッタ       |     | ○     | ○  | ○  | ○  | △  | ○  |    |    |   |       |    |    | ○ |      |    |    | ○    |    |
| ツマグロイナゴモドキ   |     | ○     |    |    |    |    |    |    |    |   |       |    |    |   |      |    |    |      |    |
| ナキイナゴ        |     | ○     |    |    |    |    |    |    |    |   |       |    |    |   |      |    |    |      |    |
| ヒナバッタ        |     | ○     |    |    |    | △  |    |    |    |   |       |    |    |   |      |    |    |      |    |
| ヒロバネヒナバッタ    |     | ○     |    |    |    |    |    |    |    |   |       |    |    |   |      |    |    |      |    |
| ヤマトマダラバッタ    |     | ○     |    |    |    |    |    |    |    |   |       |    |    |   |      |    |    |      |    |

*Mongolotettix japonicus japonicus* (BOLIVAR), ヒロバネヒナバタ *Chorthippuslatipennis* (BOLIVAR), ヤマトマダラバタ *Aiolopus japonicus* (SHIRAKI), ヒナバタ *Chorthippusbrunneus* (THUNBERG) が本土に、アカアシバタは奄美以南に分布している。イボバタは本土と硫黄島に分布している。また、ヒナバタは屋久島に、クルマバタは宝島、奄美大島、徳之島に記録がある。

大城 (1986) は、イボバタについて西表島、与那国島、宮古島の生息を確認し、さらに石垣島、沖縄本島、奄美大島における生息の可能性を示唆している。また、クルマバタの沖縄本島以南の生息確認と奄美諸島の生息の可能性をも示唆している。

### 3. イナゴ科 Catantopidae

本科の分布種は約13種ほどと予想されるが、調査が遅れており、今回は5種について報告する(表3)。すでにイナゴ属 *Oxya* 4種〔ハネナガイナゴ *O.japonica japonica* (THUNBERG), タイワンハネナガイナゴ *O.chinensis formosana* SHIRAKI, コバネイナゴ *O.yezoensis* SHIRAKI, タイワンコバネイナゴ *O.podisma* KARNY〕については、前報No.8, 1989で報告したが、新たに筆者は台湾ハネナガイナゴの生息を口之島で確認した(20-X-1989 4♀11♂採集)。また、同じく口之島ではオキナワイナゴモドキ *Gesonula punctifrons* STAL の生息を筆者は確認した(20-X-1989 12♀21♂採集)。

表3 鹿児島県におけるイナゴ科の分布

○調査及び標本による確認 △文献による確認 ●初記載

| 種名         | 地域名 | 県本土 | 三島村 |     |    | 種子島 | 屋久島 | トカラ列島 |     |     |    |       |     |     | 奄美諸島 |      |     |     |       |     |  |   |
|------------|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-------|-----|-----|----|-------|-----|-----|------|------|-----|-----|-------|-----|--|---|
|            |     |     | 黒島  | 硫黄島 | 竹島 |     |     | 口之島   | 中之島 | 臥蛇島 | 平島 | 諏訪之瀬島 | 悪石島 | 小宝島 | 宝島   | 奄美大島 | 喜界島 | 徳之島 | 沖永良部島 | 与論島 |  |   |
| ハネナガイナゴ    |     | ○   | ○   | ○   |    | ○   | △   |       |     |     |    |       |     |     |      |      |     |     | △     |     |  |   |
| 台湾ハネナガイナゴ  |     |     |     |     |    |     |     | ●     | ○   |     |    |       |     |     |      | ○    | ○   |     |       |     |  |   |
| コバネイナゴ     |     | ○   |     |     |    | △   | △   |       |     |     |    |       |     |     |      |      | △   | △   |       |     |  |   |
| 台湾コバネイナゴ   |     |     |     |     |    |     |     |       |     |     |    |       |     |     |      |      |     | ○   |       |     |  | ○ |
| オキナワイナゴモドキ |     |     |     |     |    | ○   |     | ●     |     |     |    |       |     |     |      |      |     |     | ○     |     |  |   |

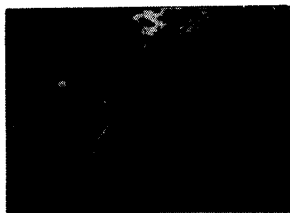


図3 オキナワイナゴモドキ (20-X-1989, 口之島)



図4 オキナワイナゴモドキに食されたタ イモの葉 (20-X-1989, 口之島)

ハネナガイナゴとコバネイナゴのトカラ以南の記録は1950年代のものである。1983年以降は図6のような分布となっている。図6はイナゴ属4種の垂直及び水平分布図で、前報No.8, 1989に発表したものに口之島の台湾ハネナガイナゴ種子島のハネナガイナゴを加えて手直ししたものである。

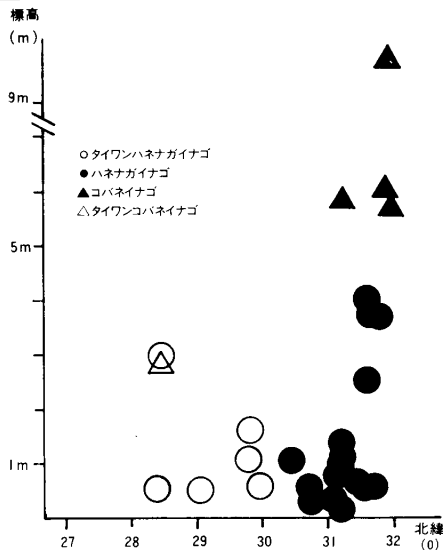


図5 イナゴ属(*Oxya*)4種の垂直及び水平分布(1983~1989)

1983年以降に限って見てみれば奄美大島以南にタイワンコバネイナゴ、トカラ以南にタイワンハネナガイナゴ、種子島イナゴが分布しており、しかも、県本土では標高500 m前後を境に、高地にコバネイナゴ、低地にハネナガイナゴという図式が浮かび上がってくる。これが最近の実態を反映しているとしたら、ここ40年の間に本県のイナゴ属 (*Oxya*) 4種の分布変化は目を見張るものがありその変化要因の解明はきわめて興味のある課題である。

しかし、屋久島をはじめ最近のこれら4種の記録の乏しさから出てきた傾向かもしれない。新たな現地調査とこれまでの追跡調査を急がねばならない。

#### 4. 摘要

(1) オンブバッタ科2種について、その分布を報告すると共に、中之島のアカハネオンブバッタを初記載。また、アカハネオンブバッタの淡色系がオンブバッタに誤認されている可能性が高く2種の同定基準の見直しと、トカラ以南のこれまで記録されているオンブバッタのあらいなおしの必要性を提示し、中之島でオンブバッタとアカハネオンブバッタの分布が入れ替わっている可能性を示唆した。

(2) バッタ科12種について、その分布を報告した。

(3) イナゴ科5種について、その分布を報告すると共に、口之島のオキナワイナゴモドキ、タイワンハネナガイナゴを初記載。ここ7年のイナゴ属 *Oxya* 4種の垂直及び水平分布図を示し、最近の傾向とその裏付けのための調査の必要性を提示した。

表1, 2, 3に見られるように、未記録、未調査地域が圧倒的に多く、本県のバッタ目の分布調査の集大成は緒についたばかりである。今後、今回報告した種も含めて新しい記録を織り込みながら逐次報告していく予定である。

#### 参考文献

- 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター 共同編集, 1989. 日本産昆虫総目録 A Check List of Japanese Insects, 九州大学農学部昆虫学教室, 福岡
- 日浦 勇, 1978. 1センチ以上の昆虫誌7 バッタ〔1〕 Nature Study 24(10): 24~28
- , 1979, 1センチ以上の昆虫誌8 バッタ〔2〕 Nature Study 25(1): 6~8
- 大城 安弘, 1986. 琉球列島の鳴く虫たち 鳴き虫会 沖縄
- 大坪 修一, 1985. 北薩地方の直翅類 鹿児島昆虫同好会総会資料
- 福田 晴夫, 田中 洋, 成見 和絵, 中尾 健一郎, 1971. 屋久島, 8月の昆虫類 SATSUMA 20(60): 69-70, 鹿児島昆虫同好会, 鹿児島
- 山下 秋厚, 1981. 鹿児島県の直翅目——その分布の概要——SATSUMA 30(85): 173~196
- , 1985. 秋に鳴く虫, 南海日日新聞(名瀬)記事再編集
- 伊藤修二郎・奥谷 禎一・日浦 勇, 1981. 原色日本昆虫図鑑 下巻, 保育社, 大阪
- 畑田 健治, 1989. 鹿児島県立博物館研究報告 第8号: 11-16, 鹿児島県立博物館